

しつけと虐待の境界は
どのようなものなのだろう

東京慈恵会医科大学 看護学科
細坂泰子

しつけと虐待について

- 児童虐待相談対応件数は20年以上増加し続けています。
- 今までの研究から、虐待は身体に障がいがあることや育てにくさ等の子ども要因、経済的な問題や地域から孤立しているなどの環境要因、母親自身の障がいや問題などのリスク因子が、重なって起こることで虐待の発生につながるということが明らかになっています。
- 一方で、皆さんは新聞やニュースで「“しつけ”として叱った」という言葉で現わされる、虐待の報道を聞いたことはありませんか？

私達研究班は、“しつけ”と“虐待”の境界はどのようなものなのだろう、それが分かったら、しつけに隠される虐待を事前に見つけられるのではないかと考えました。

この研究で調べたいと考えたこと

1. 小さな子ども（乳幼児）を育てるお母さんは“しつけ”と“虐待”、そしてその境界をどう考えているのだろうか
2. 乳幼児を育てるお母さんは、どのような時に自分の子育ての中で、これはしつけかな？虐待しちゃってるのかな？と不安に思うことがあるのだろうか



※虐待は0歳～3歳までの子どもを育てているお母さんが多いことが今までの研究から分かっています。そのため、小・中学生のお母さんではなく、乳幼児を育てているお母さんを対象としました。

研究方法

1. 対象とするお母さんは、首都圏の幼稚園や保育園に、研究についてのポスターを貼り、応募してきてくださった方を対象としました。
2. 研究の参加に同意してくださったお母さんを研究者とが1対1で、1時間くらいの下記のインタビューを行いました。
 - 自分の育児の中でしつけかな？虐待かな？と迷った体験について
 - どんな時に迷ったのか
 - 育児が辛いな、と感じた体験とその時の気持ち
3. 分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを使用しました。
(*詳しくは本論文を参考にしてください)
4. 参加してくださったお母さんの個人情報などをしっかりと守るために、所属施設の倫理委員会の承認を受けました。

参加してくださったお母さん26名の情報

- お母さんの平均年齢は39.0歳で、33～49歳でした。
- 子どもの平均人数は1.8人で、最大4人のお母さんもいました。
- 女の子のみを育てている母親は11名、男の子のみの母親は13名、男女を育てている母親は2名でした。
- 全員が子どもと夫と同居していました。
- 職業は専業主婦が11名、正社員やパートなど仕事をしている人が15名でした。
- インタビュー時間は一人あたり平均67分で、38～95分でした。
- インタビューは対象のお母さんのご自宅の近くの静かなカフェ等を利用しました。



研究結果の概要

カテゴリー

母親が感情的になると無意識に押しつけてしまう子どもへのパワー

子どもの属性で異なるしつけ

しつけに対する他者評価の優位性

理想の母親像や母親としての責任感から蓄積する疲弊

周囲の支援や母親自身の力によって変化する心の余裕

分析の結果、上記の5つのカテゴリーが明らかになりました

【母親が感情的になると無意識に押しつけてしまう子どもへのパワー】 について語ったお母さんの声

概念

感情優位で生じる
不条理な境界

大人の権力で
ねじ伏せられる子ども

しつけの良し悪しへの
葛藤

「その子のために言っていたことが、自分のイライラをぶつけるためだけに言葉を発するようになってくるんですね。自分のイライラを抑える為だけに叫んでるみたいな感じ。ストレス発散ですよ。」

「やっぱり弱いんですよ子どもって。人として扱ってないっていうのも突拍子のない言い方なんですけれど、叩いている瞬間は忘れてますよね。無視して忘れる。」

「普通に悪いことをしたら叩くというのが日本の子育てだったわけで。（中略）そういうので育ってきてるから、悪いことしたら叩かれることもあるんだっていう風に思う自分がいて。二つの価値観の中でちょうど生きてきた私にとってはどっちを採用しなくてはいけないのかってところで揺れるんです。」

【子どもの属性で異なるしつけ】について語ったお母さんの声

概念

発達によって変化する境界

「小さい時は親がサポートしなきゃいけないことってあるじゃないですか？それをしなければ生きていけないこともあって、それを絶ってしまえば“虐待”になるのかな」

二人目の負荷と達観

「やっぱり一人が二人になった時ですね。体もしんどかったし、下の子はよくわからずに泣くし、お姉ちゃんも赤ちゃん返りで、もう。わけもなく涙が出ました。」

性差で異なる育児方針

「男の子であれば、ちょっと頭ゴツンとか、お尻をパンってやるとか、そういうしつけがあってもいいんじゃないかなあって私は思っちゃってて。」

【しつけに対する他者評価の優位性】 について語ったお母さんの声

概念

他者へのアピール
としての育児

「周りが自分をどう見るんだろうというのにすごくとらわれて、何とかしなければ私がどう思われちゃうんだろうっていう思いがあって。なんとか、なんとかって。」

理想の母親であるべし
という承認欲求

「子どもが結構毎日ギャーギャー、ギャーギャー泣いたりとかする声。その、世間体的な、いつか児童相談所の人やピンポンって訪ねてくるんじゃないかとか、こんなに毎日泣いていて、なんか「あのお母さんが」みたいに言われているんじゃないかなあとか、そういう心配も、やっぱりあります。」

泣かせちゃいけない
プレッシャー

「なんでうちの娘だけ？っていう思いにとらわれてしまって、そこから何度言っても伝わらない娘にイライラしてきて、すごく大きな声で怒ってしまったり、手が出てしまったり。」

他の子と比べること
で陥る苛立ち

「周りがすごく優しいママに見えるから、自分はいつもなんでこんなに怒っているんだらうとか、すごく自責の念に駆られるんですよね。」

周囲に見る素敵ママ
から受ける焦燥感

【理想の母親像や母親としての責任感から蓄積する疲弊】

について語ったお母さんの声

概念

母親の育児責任の重さに対する不安と焦り

「自分がきちんとかう、大人にしていくっていう責任をすごい感じていて。自分の子は自分が言わないと、自分がちゃんと言わないと、自分がちゃんとやらないと、誰も言ってくれない、責任、みたいなことはすごい感じていて。」

答えのない育児の中でもがき続ける母親

育児の結果ってすぐに見えないですよ。親の思う育児のゴールって、一人で生きていく力を持つってというのがゴールなんですね。どうしたらニートにならないかなんて、誰も答えを出してないですよ。

子どもを預ける事への罪悪感

「午後、2、3時間預けるのも、なんか、預けるっていうのがちょっとダメな…できていない親みたいな感じになるので。保育園とかはお母さんが仕事を持っているのでまた別なんでしょうけど。」

溢れる情報に翻弄される

365日続く育児に疲弊する母親

「今は情報が盛んだし、こうやってしつけるとこういう子になるとか、すごくTVとかでやってたり、育児雑誌もいっぱい書いてあるし。そういうのにやっぱり発育時はとらわれまくってますよね。」

【周囲の支援や母親自身の力によって変化する心の余裕】 について語ったお母さんの声

概念

精神的・物理的支援に比例する
母親の安定力

子どもでつながるママ友に
感じる支えとストレス

頼りになる専門家の知識と情報

育児中の孤独感の
切羽詰まった辛さ

虐待をする母親と紙一重の怖さ

「ママ友って結局人間対人間じゃないですか、言ってしまうと煩わしい部分もあって。本当に気心が知れた仲だったらいいんですけど。期間限定の付き合いじゃないですか、子ども有りきだから。」

「育児不安の解消のきっかけになったのはママ友です。友人がいなかったらやっていけませんでした。」

「近所にも行き来出来る友達もまだいなくて、孤立してるなっていう感じがありました。その2歳から3歳までの時がけっこう一人で育児、みたいな感覚で辛かったです。」

「私もそういう時代は（ニュースで報じられる虐待事件と自分自身が）紙一重だったのかなと思って。周りに助けてくれる人がいない、私も母親が遠方だったんですね。なので小さいときは自分と子どもしかいないみたいな感じだったので、気持ちが分かるような。本当に紙一重だなって。」

この研究で分かったこと

- しつけと虐待の境界には5つのカテゴリーが影響していたことが分かりました
- お母さんはしつけと違ってしている行動が、他者からの非難や疲労や疲弊、親から子どもへのパワー、子どもが元々持っている特性によって、虐待につながる可能性があります
- 一方で周囲のサポートや母親自身の能力によって、虐待を阻止できる可能性があることが分かりました
- しつけと虐待の境界は動くものであり、幅のある可能性があります。しつけから虐待に移行させないためには、しつけと虐待の間にある境界の幅を広く、かつ虐待に移行させない必要があります。
そのためには周囲の人が母親を肯定すること、母親の気持ちを出せる場を作ること、子どもの特徴に合わせた育児方法を伝えること、お母さん自身が疲れなようなサービスの活用などが必要であることが分かりました

この研究だけでは分からなかったことやこの研究の問題点

- 対象のお母さんは自主的に参加を希望された方達です。そのため、研究参加のポスターに記述した、この研究名が示すしつけや虐待に心理的に抵抗がある方は対象にならなかった可能性があります
- しつけとは、虐待とは、といった言葉の持つ意味をお母さん自身に語ってもらったために、それぞれのお母さんが考える言葉の意味が違った可能性があります
- 研究結果では性別や出生順についての違いが出てきましたが、対象としたお母さんの子どもの男女数や出生順を考慮せずに集めたため、それらの影響が結果に反映されている、もしくは反映されなかった可能性があります